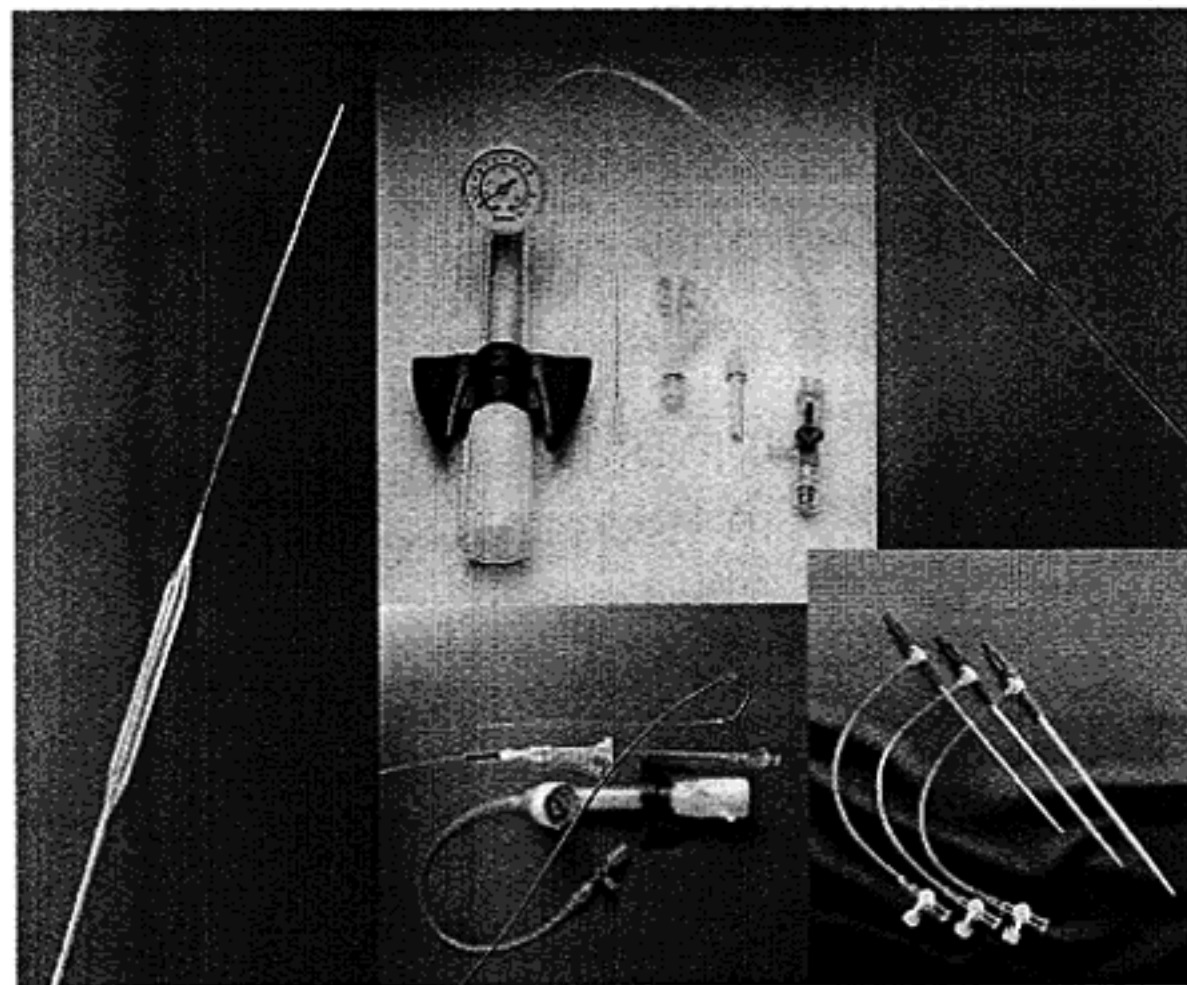


▼PTCAに用いられる医療機器の款々



▲左から鈴木、加藤、玉井の3氏



Takahiko Suzuki Osamu Katoh Hideo Tamai

心血管インターベンションの さらなる可能性を求めて…

10月6～8日、滋賀県大津市で第5回「CCIC（コンプレックス・コロナリー・インターベンション・カンファレンス）」が開催された。全国各地の医療機関で、狭心症や心筋梗塞（こうそく）に代表される虚血性心疾患の内科的治療、いわゆる心血管インターベンションに携わる医療者が一堂に会し、互いの技術向上と若手医師の教育を図るために毎年開いているもので、今年は海外の専門家を含め約1500人が参加。ライブデモンストレーション、シンポジウムといったさまざまなプログラムを通じて、活発な議論を交わした。今回、そのCCICの中心メンバーである豊橋ハートセンター（愛知県豊橋市）院長・鈴木孝彦氏、滋賀県立成人病センター（滋賀県守山市）救急部長兼循環器科・玉井秀男氏、京都桂病院（京都市西京区）心臓血管センター長・加藤修氏の3人に集ってもらい、虚血性心疾患についての基本的な知識とともに、治療の主流である心血管インターベンションの現状と課題、CCIC開催の意義などを聞いてみた。

（文中敬称略、順不同）

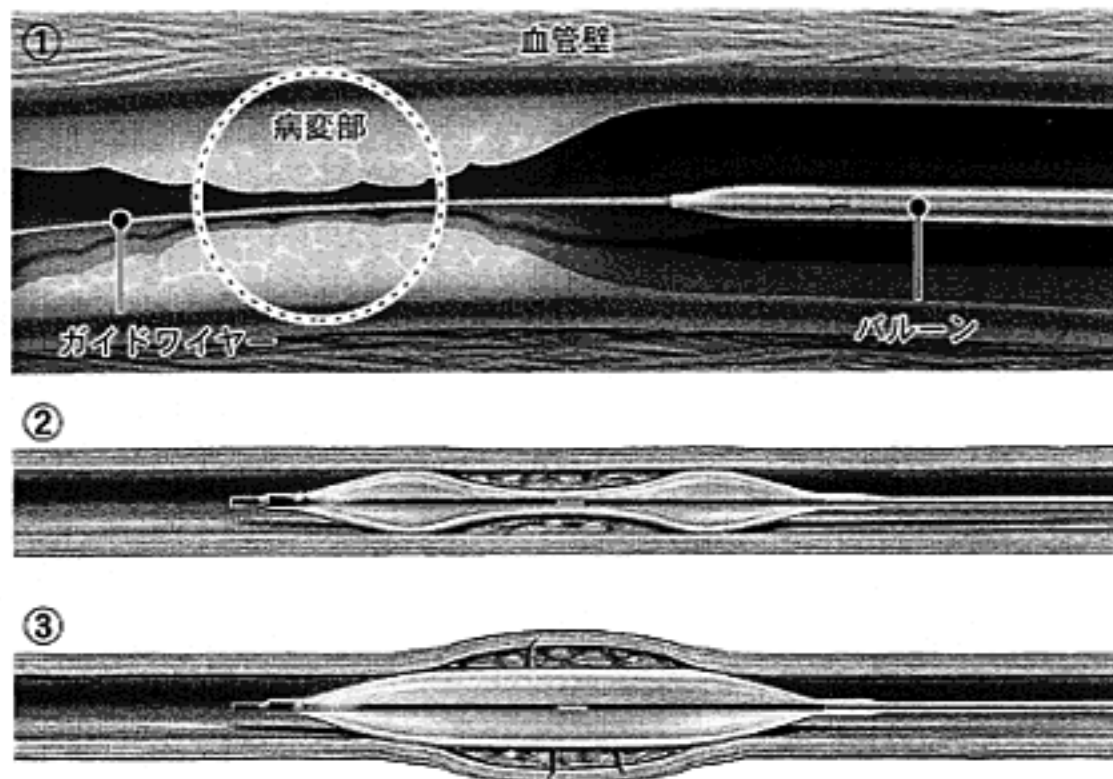
【 豊橋ハートセンター院長 鈴木 孝彦
滋賀県立成人病センター救急部長・循環器科 玉井 秀男
京都桂病院心臓血管センター長 加藤 修 】

PAGE 2 虚血性心疾患治療の主流「PTCA」

PAGE 3 「CCIC」で、医療技術の向上を図る

PAGE 4 長期的視点で、医療レベル全体の底上げを

●イラストで見るPTCAの仕組み



①ガイドワイヤーを通して、バルーンを病変部へと導く②バルーンが病変部に到着③バルーンをふくらませて、血管を広げることにより、血流が再開される

バルーンで血管広げる 虚血性心疾患治療の主流 「PTCA」

「最初に、虚血性心疾患とその治療法の種類について、簡単に説明ください。」

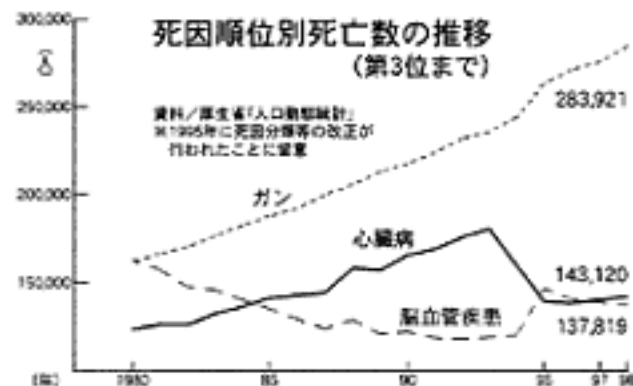
鈴木 虚血性心疾患というのは、心臓に血液を送る冠動脈が動脈硬化を起こし、血管が狭くなったり（狭さく）、詰まったり（閉塞）して、心臓への血液の供給がうまくいかなくなるために発生する心臓病の総称です。代表的な虚血性心疾患には、狭心症や心筋梗塞があります。

玉井 厚生省の人口動態統計によると、国内における昨年一年間の原因別死亡数のうち、最も多かった死因はガンで、約二十八万四千二人。虚血性心疾患を含む心臓病は、第二位の約十四万三千人で、少しずつ増加しています。（右下のグラフ参照）

井原 冠動脈狭窄、その他の心臓病は減少傾向にありますから、死亡数の増

冠

動脈の硬化で血管が狭さく、詰まり



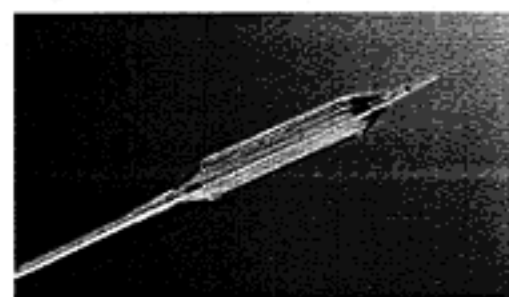
加はそのまま、虚血性心疾患で亡くなる人が増えてきているということでしょう。

加藤 虚血性心疾患の治療法は、大きく三つに分かれます。まず一つ目は、外科的なバイパス手術。二つ目は私たちが専門としている内科的な、いわゆる心血管インターベンションの一種のPTCA。そして三つ目が薬物治療です。

そのいずれの場合でも、心臓への血液の流れを確保するのが、治療の最大の目的となります。

繊

細な治療を支える医療機器の数々



最近では、薬剤自体につけたブレード(刃)で病変部に切れ込みを入れ、拡張とともに切開口を深めて、内径を拡大させる「カッティングバルーン」も登場している

「では次に、この専門のPTCAについてうかがいます。」

玉井 大體（たい）動脈などから「カテーテル」と呼ばれる細い管を持ち入り、冠動脈まで到達させた後、バルーンをふくらませて、狭まった血管を内側から広げるといいますが、PTCAの基本的な仕組みです。胸を切開し、別の血管をつなぐバイパス手術に比べて侵襲が少ない（体への負担が小さい）点、また薬物治療のような対症療法ではなく、狭さく部を解除して再度十分な血流を確保する治療であり、生活の質の向上や予後も改善するなどの点から、国内で広く行われています。

「PTCAでは、バルーン以外にもさまざまな医療機器が使われるそうですね。」

加藤 その代表的なものが、「ス

テント」という金属の網です。このステントをバルーンにかぶせて、冠動脈の治療箇所へ持ち込む。そこでバルーンをふくらませると、ステントも広がる。その後バルーンを縮めても、ステントは広がったままで残り、血管の内側から支えます。このステントのおかげで、PTCAの大きな課題であった急性冠閉塞（広げたはずの冠動脈が、数時間以内に突然詰まってしまう）の割合が、以前と比べて顕著に減少いたしました。私たち医師は、病変によってさまざまなステントを使い分けています。

鈴木 最近では、「ロータブレード」も登場していますよ。

ロータブレードは、先端に約二千個の人工ダイヤモンドをつけた超小型ドリルです。これを冠動脈の内側に挿入し、毎分十四万〜十九万回転も的高速で回転させて、血管壁にコレステロールが詰まっていた動脈硬化（アテローム）を削ります。

玉井 動脈硬化を起こし、石灰化して文字通りガチガチに硬くなった血管を治療できるのは、今のところロータブレードしかありません。

加藤 そのほか、ロータブレードと似た働きをする「DCA」など、心血管インターベンションに用いられる医療機器は、ここ数年だけでも驚くほど進歩しています。

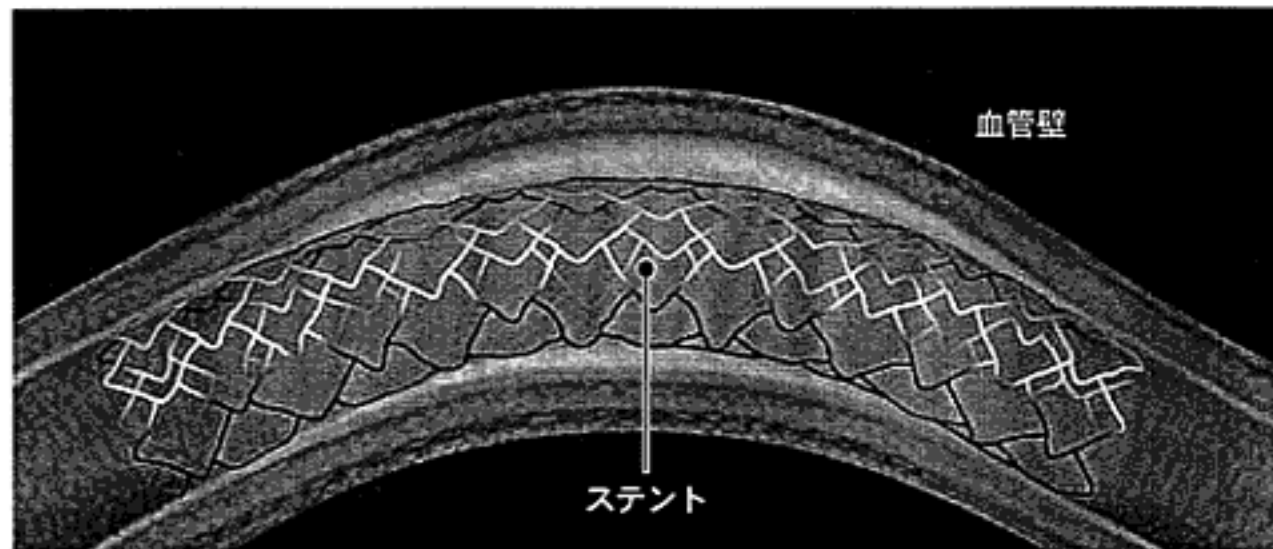
もっとも、それらを日々の臨床の場でどう生かすかは、結局のところ使う医師の腕次第です。心血管インターベンションのさらなる可能性を開くためにも、私たちは自らの技術を高めるべく、常に研さんを積み重ねてまいります。それが人命にかかわるとなればなおさらです。

玉井 秀男

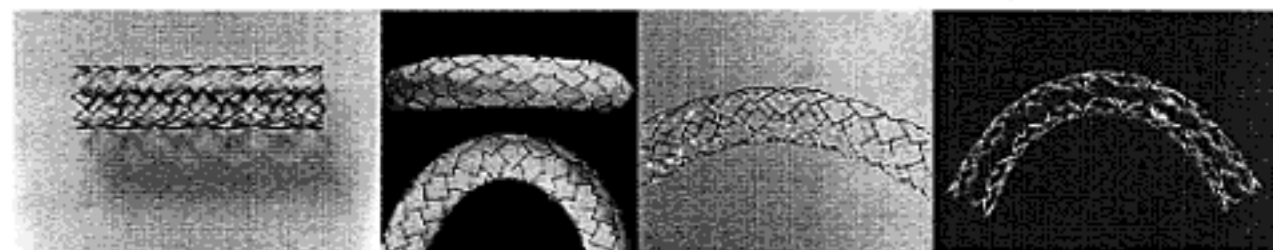


（たまい・ひでお）……1949年生まれ、74年、奈良県立医科大学を卒業し、翌年から京都大学医学部第三内科に研修生として配属。その後、滋賀県立成人病センター循環器科に入局、96年からは同教務部長も兼任し、今日に至る。91年には日本心血管インターベンション学会理事に就任。長年の臨床経験を生かして先ごろ、トウモロコシの粉を原料としたステントを開発し、世界的な注目を集める。

●イラストで見るステントの仕組みといろいろなステント



ステントをバルーンにかぶせ、冠動脈の治療箇所へ持ち込む。そこでバルーンをふくらませると、ステントも広がり、血管を内側から支える



「CCIC」で、医療技術の向上と若手医師の教育を図る

医

療者同士で
研さん積める場を

— 今お話が出た、心血管インターベンションをめぐる医療者側の取り組みに、「CCIC」というものがあるそうですね。先生方は、その中心メンバーとうかがいましたが…？

玉井 加藤先生の言葉を借りるなら、ステントやロータブレードは確かに医療機器そのものの進化です。よね、しかし同時に、臨床の場ですれを扱う医師の医療技術が進歩しなければ、せっかくの優れた機器も「宝の持ち腐れ」ということになる。PTCAにして、バイパス手術にして、それを行う医師自身が優秀でなくては…。

加藤 一人の医師が自分の医療技

ラ

ライブを通じて
世界へ情報発信

— 期間中、実際の虚血性心疾患患者にPTCAを実施し、それを海外の病院に衛星生中継するライブデモンストレーションも行われたそうですが…？

玉井 今回のライブでは、滋賀県立成人病センターで実施したPTCAの模様と、山田赤十字病院（三重県伊勢市）およびアメリカのマリアミ心臓研究所の映像を、衛星中継で大津の会場に放送し、手技終了後、ライブに関するセミナーも衛星を通じて行いました。

鈴木 ライブ自体は、CCICの発足前から続けていまして、もう十

術を進歩させようと思えば、やはりできるだけ数多くの症例を経験し、かつ他の医師と互補（きたん）ない意見を交わすなかで研さんを積み、自分自身を高めていくほかないんですが、例えば患者さんの絶対数が少ない地域の医師、あるいは手技そのものを行うことの少ない若い医師にとつて、勉強できる場が多いとはいいたい。その結果、一部の医師だけが経験豊富で、残りは技術を磨く機会に恵まれないことになる。

玉井 そうはいつでも現実的に、患者さんは全国各地にいますから、私たちは常々、どの地域、どの病院であっても、レベルの高い医療サービスを等しく提供できるようにしなければと考えていました。もちろんその思いは、全国の他の先生方も同様だったでしょう。

— そこで次第に、「心血管インターベンションに携わる医療関係者が、せめて一年に一度集まって、お互いに勉強できる場をつくらうじゃないか」という機運が高まってきた、そうしてCCICが誕生したんです。

鈴木 五回目となった今年のCCICは十月六〜八日、玉井先生のおひざ元の滋賀県大津市で開催しました。日本全国、そして海外から千五百人を迎える医療関係者が集まり、心血管インターベンションの現状や課題、展望などについて活発な議論を展開することができました。

ちなみに来年は、私が世話人となつて豊橋で開催する予定です。

回以上行っていますが、今回もまた非常に実り多いものになりましたね。

— ライブを行い、それを衛星を通じて公開することに、どんな意味があるんでしょう？

玉井 例えば私たち三人が同じ患者さんを診たとして、その症例をどのように治療するかという判断は、それぞれ微妙に違うわけですよ。最終的に求めているものは同じだし、でもね。

— そうした意見の違いというのは、医師の数だけありますから、いろいろな医師が代わるがわるライブを行い、技術を公にすることは、見る側の選択を広げるといって意味で非常に勉強になると思うし、またライブの結果自体、力量の違う医師同士が討論するための材料にもなる。

鈴木 医療の世界では、すべてにおいてアメリカが最も進んでいるように思われていますが、こと心血管インターベンションの領域に関しては、日本もけっこう負けてはいません、それどころかむしろ、日本のほうが進んでいるところもある。

— したがって私たちが行っているライブには、国内の医師の教育という目的のほかに、海外で同じく心血管インターベンションに携わる医師を教育するという目的もあるんです。日本の技術を世界に示すことで、学ぶべきところは学んでもらえばいいし、逆に海外の医師の意見から私たちが吸収することもあるでしょう。

— そうしてお互いに切磋琢磨（せつたくま）させつつ、さたかましながら、技術の向上を図れるというのも、CCICのユニークな特徴ですね。

加藤 医師自身が、世界へ向けて情報を発信する機会というのは、例えば論文を書いたり学会で発表する以外、あまりないんですよ。そんななかで、自分の医療レベルをライブで公開し、それについてたくさんの方の意見を聞き、ときには批判も受けながら、議論を重ねていくというの、独善的な医療を防止する意味でも非常に意義のあることだと思います。

— ですから今、CCICの取り組みが海外でも高く評価されている理由の一つには、そうした世界へ向けての情報発信の場となつていることが挙げられるのではないのでしょうか。

自らの医療レベルを積極的に世に問うていく。その経験がまた、医師一人ひとりを大きく成長させる。

加藤 修



（かとう・おさむ）………1952年生まれ、78年3月、大阪医科大学を卒業。4月から愛媛大学医学部第二内科に入局。同年10月、西大阪病院内科に移る。83年から桜橋渡辺病院循環器内科医長を務めた後、90年に大阪府立成人病センター研究部第一部長となる。95年、フランクフルト・ハートセンター（ドイツ）の技術顧問に、97年、京都桂病院・心臓血管センター長に就任し、現在に至る。

